

ヘミングウェイにおける 「清潔な」場所について

新井哲男

It was late and every one had left the café except an old man who sat in the shadow the leaves of the tree made against the electric light. In the daytime the street was dusty, but at night the dew settled the dust and the old man liked to sit late because he was deaf and now at night it was quiet and he felt the difference. ('A Clean, Well-Lighted Place' p.17)⁽¹⁾

(夜も遅く、一人の老人を除いてすべての人がカフェを去っていた。老人は木の葉が電燈の明かりを遮って作る葉蔭に座っていた。昼の間、通りは埃にまみれていたが、夜は露が降りて埃を鎮めた。老人は夜遅くまでそこに座っているのが好きだった。というのも彼は聾で、今、夜になると辺りは静かで、その違いが感じられたからである。)

ヘミングウェイ(E. Hemingway)の「光によく照らされた清潔な場所」('A Clean, Well-Lighted Place')の冒頭に置かれた上記の描写は、作品で描かれるカフェと外部の社会との対比を鋭く描きだしている。カフェのテラスには、老人が一人おり、明るく照らされた電燈によりできる木の葉の蔭に座っている。夜も遅く、カフェに客としているのは彼一人である。カフェは明るく照らされているが、木の葉の蔭もあり、そこに老人は座っている。彼は、カフェのテラスではあるが、木蔭で安らいでいるのである。

日本語には、緑蔭という言葉があるが、木は緑を思い浮かばせ、林や森を想起させる。フィッツジェラルド(F. S. Fitzgerald)は『偉大なるギャツビー』(*The Great Gatsby*)の中で、恋人デイジー(Daisy)のことを思い続け、デイジーの住む屋敷のある波止場にたつ緑の灯をじっと見続けるギャツビーの姿を作品の最初に紹介し、作品の終りではその緑の灯が内包する含意を「(開拓時代のオランダ人船乗りたちの目に映った)新鮮で緑におおわれた新大陸の胸」('a fresh, green breast of the new world')⁽²⁾と説明する。フィッツジェラルドにとって、緑の森は大きな夢の徴であった。ヘミングウェイにとって、緑の森はやすらぎを与えてくれる大自然である。個人により差異はあるにせよ、アメリカ人の心の奥には、遠い昔、彼らの祖先たちがアメリカ大陸にはじめてやって来たときに船上で目にした、新鮮で、瑞々しい緑の大陸、緑の林、緑の森に対する思いが、フロンティアがなくなったと言われる現在でも残っているように思われる。実際、開拓当時は緑の森には、文明に汚されていない自然なままの生き生きとした大自然があった。時代が移り、世の中が変わっても、緑の森の中には、現実社会から隔離された新鮮な大自然が残っており、その大自然のやすらぎが人間をやさしく包んでくれる。

ヘミングウェイは、最初の短編集『我らの時代に』(*In Our Time*)の二番目に置かれた作品「医者と医者妻」('The Doctor and the Doctor's Wife')において、医者であるニックの父が森に足を踏み入れた時の感触を「こんな暑い日でも、森の中は涼しかった」(It was cool in the woods even on such a hot day.) (p.27)⁽³⁾ (下線は筆者)と記している。作品では、流木を薪にする件で雇用人と激しく口論し、疲れて帰ってきたニックの父が今度は家で妻と冷たく対立し、精神的に更に一層疲れきり、家を出ていく様子が描かれるが、家を出たニックの父は森に行き、涼感を得る。現実社会での諍いに疲れた彼は、森の中ではじめてやすらぎを得ることができるのである。ここで用いられている 'cool' は同じ文中の 'hot' と対比され、文字通り「涼しい」の意味を表しているが、それ以上に、彼が森に

入り「さわやかな心の憩い」を得たことを表している。実際、彼はこの後更に森の奥に入り、息子のニック (Nick Adams) と心の通いあった会話を楽しむ。

同じ『我らの時代に』の最後に置かれた作品「心の二つある大きな川」(‘Big Two-Hearted River’)においても、大自然に包まれやすらぎを覚えるニックの姿が描かれる。現実社会での戦いに疲れたニックは、少年時代によく過ごした森に向かい、冷たい小川の流れに触れ、生き生きとした鱒を見つめ、現実社会で受けた傷を癒していく。

It was a hot day. A kingfisher flew up the stream. It was a long time since Nick had looked into a stream and seen trout. They were very satisfactory.

Nick's heart tightened as the trout moved. He felt all the old feeling. (p.134)⁽⁴⁾

(暑い日だった。かわせみが上流に向かい流れから飛び上がった。ニックがこの前流れを見、鱒を見てから長いこと経っていた。これらを見ているととても満ち足りた気分になった。…

鱒が動いた時、ニックの心はぎゅっと緊張した。彼はあの昔の感情をすっかり感じた。)

世の中の汚れを何も知らない無垢な時代楽しく過ごした川にきて、ニックは遠い昔の感触を思い出し幸福感に浸る。ここでニックの心は少年時代に立ち返っているわけだが、ただ単に彼が少年時代の個人的体験に立ち返っているだけではなく、遠い昔のアメリカ開拓当時の彼らの祖先たちが経験した思いに立ち返っているとみることもできる。また、更に広く解釈すれば、アメリカ人に限らず、人間が文明の発達する以前に過ごした大自然の中での生活に立ち返って文明生活の疲れを癒しているとみることもできる。

ニックは、この地でキャンプを張り一泊するが、翌日「さわやかな流れ」

(‘the clear flowing current’)(p.154)⁵⁾の中で鱒釣りをし、その後で「丸太に腰をおろしながら、木蔭は涼しかった」(It was cool in the shade, sitting on the log.)(p.154)(下線は筆者)と感じる。ここでは「医者と医者の妻」で用いられたのと同じ用法の ‘cool’ が、同じ含意をもって使用されている。

論を「光によく照らされた清潔な場所」に戻すと、この論の冒頭に引用した作品冒頭の場面では、明るい電燈が照らしたカフェのテラスの木蔭は、社会全体が都市化し、人も心も物も文明化した現代社会の中に存在する「現代の大自然」であり、そこで休む老人は森の中で憩いを得る医者やニックの姿と重複する。これを裏付けるかのように作品では、冒頭の引用のすぐ後に、この老人が先週自殺をはかった(結果としては姪に助けられ未遂に終わった)ことが述べられる。しかもその原因は、何か特定の出来事に対してなされたのではなく、ただ「絶望した」(“He was in despair.”)(p.17)という以外記されていない。ヘミングウェイは「兵士の家」(‘Soldier’s Home’) で、若いアメリカ女性たちの住む社会を「複雑な社会」(‘a complicated world’)(p.71)⁶⁾と位置づけ、主人公クレブス(Krebs)に「とてもその中に入っていこうという気は起きなかった」(Krebs did not feel the energy or the courage to break into it.)(p.71)と感じさせているが、複雑な社会に住むのは、若い女性たちに限ったことではない。複雑な社会に住むことに疲れた老人は、現代の森であるこの木蔭のあるカフェにきて休む。「光によく照らされた清潔な場所」では、人間が生きていく上で大切なものとして、光(‘light’)と共に清潔さ(‘cleanness’)と秩序(‘order’)が強調される⁷⁾が、現実の社会はまさに、これとは逆の、汚い埃にまみれ、混沌の渦巻く暗い闇の世界なのである。

この論の冒頭に引用した作品冒頭の描写は、この混沌とした汚い現実社会の様子を暗示的に示している。カフェの外である街路の描写には、‘dust’ ‘dusty’ という語が使われ、光に照らされ、木蔭のあるカフェと対照的である。今は夜も遅く、夜露が埃を鎮め、辺りの空気を穏やかにしているが、

昼間は喧騒としていることがうかがえる。老人は聾だが、聾だからこそ一層鋭く喧騒感の違いがわかるのだろう。だからこそ彼は、静かな夜に来て、夜遅くまでここにいてグラスを傾けるのだ。

埃にまみれた現実社会との対比は、『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)で、老人がただ一人海に出ていく場面を想起させる。

The old man knew he was going far out and he left the smell of the land behind and rowed out into the clean early morning smell of the ocean. (p.28)⁽⁸⁾

(老人は、自分が遠くまで出ようとしていることを知っていた。そして彼は陸の臭いを後に残し、清潔な早朝の海の臭いの中へと漕ぎ出していった。)

老人は、ここで「陸の臭い」を後に残し、「清潔な早朝の海の臭い」の中へと漕ぎ出していくが、ここでもまた、陸の臭いと海の臭いとの対比が鮮やかである。陸にはもろもろの悪臭腐臭が渦巻いている。老人はそれらを後にして、清潔な早朝の海の臭いの中へと旅立つのである。奇しくも「光によく照らされた清潔な場所」の老人は「清潔な('clean')」カフェにおり、『老人と海』の老人は「清潔な('clean')」臭いのする海へと旅立つ。そして、この二人の老人の背後には、埃の渦巻く社会があり、悪臭漂う社会がある。

では、「光によく照らされた清潔な場所」でカフェの外の埃の渦巻く社会には何があるのだろうか。作品には、ともすれば見過ごされがちではあるが、現実社会を照射していると思われる文がみられる。一つは、作品の冒頭でカフェのテラスにただ一人座る老人と対照的に、カフェの前を通り過ぎる二人連れの男女の姿である。

They [The two waiters] ... looked at the terrace where the

tables were all empty except where the old man sat in the shadow of the leaves of the tree that moved slightly in the wind. A girl and a soldier went by in the street. (pp.17-18)

(二人のウェイターはカフェのテラスを見た。テラスのテーブルは、風に揺れてかすかに動く木の葉の蔭に老人が座っている席を除いては、すべて空いていた。一人の女と兵士が街路を通り過ぎていった。)

ただ一人テラスに座る老人と、その側の通りを歩いていく二人連れの男女の姿は対照的であり、‘empty’という語が老人の孤独な姿を一層強く浮かび上がらせる。しかし、同時にまた、この対照は、老人が男女の営みを持つ世界とは無縁の存在であることを強く示唆している。実際、後のウェイター同士の会話で、「老人にもかつては妻がいた」(“He had a wife once too.”) (p.20)と言われるが、このことは、現在老人に妻がいないことを作者が強調している表れである。

老人の心を理解しない年下のウェイターが、老人を早くカフェから追い出したい理由も、男女の営みに関係している。彼は、「あの老人は孤独だ。俺は孤独ではない。俺には妻がいて、ベッドで俺を待っているんだ」(“He’s [The old man is] lonely. I’m not lonely. I have a wife waiting in bed for me.”) (p.20)と言うが、家に帰って一緒に床に入る妻がいることは、彼の住む世界が老人や老人の心を理解する年長のウェイターの住む世界とは異なることを際立たせている。このことは作品で、老人の心を理解しない年下のウェイターに関し、作者が「妻のいるウェイター」(‘the waiter with a wife’) (p.21)と表現していることからわかる。作者は、妻がいるか否かをその人間がどのような世界に住んでいるかを示す重要な判断基準の一つにしているのである。老人の心を理解するウェイターは、年下のウェイターに「おまえには若さがあり、自信があり、仕事がある。…おまえは何でも持っている」(“You have youth, confidence, and a job, .. You have everything.”) (p.22)⁹⁾と言う。この言葉は、まるで「おま

えは、まだ若い。自分の力を過信して自惚れてはいけない」と諭しているかのようである。一方、老人の心を理解できない年下のウェイターの言葉は、若さゆえのいたらなさを暴露している。しかし、彼の言葉は、他人の心の痛みを理解できないし、理解しようとしもない多くの一般の人たちの心を代表しているとみることもできよう。いずれにせよ、年長のウェイターは老人をよく理解している。そして人間をよく知っている。人間は、行き着く所、誰でも孤独である。孤独の中で人間は生きているのである。年長のウェイターはそのことをよく知っている。

女性との関わりという点から見ると、このカフェにはウェイトレスがいないことも一つの特徴である。『老人と海』に男女二人連れの旅の女性を除いて女性があらわれないことと同様に、この作品でもカフェの外を通り過ぎてゆく男女二人連れの女性と老人の自殺を未遂に終わらせる老人の姪を除いて女性は登場しない。つまり、カフェの中に女性はいないのである。カフェにいるのは、老人とウェイター二人の男だけである。年長のウェイターは、老人を通して人生を考え、人の生を考える。このような思考の場に女性是不要というのであろうか。或いは思考の妨げになるというのであろうか。ともあれ、このカフェに女性是不存在しない。そしてその女性のないカフェを指して、年長のウェイターは、年下のウェイターに対し「おまえはわかっていない。ここは、清潔で、気持の良いカフェなんだ。光が十分にあたっている。光はとても良いものだ。それに今は木の葉の蔭もある」(“You do not understand. This is a clean and pleasant café. It is well lighted. The light is very good and also, now, there are shadows of the leaves.”) (p.23) と言う。つまり、清潔で、心地よく、光があふれ、木蔭のあるカフェは他の場所とは違うのだと。

現実社会を映す影のような存在として、衛兵の姿も見られる。作品には、ウェイターの言葉として女連れの兵士が通りすぎた後、衛兵が5分前に通り過ぎたばかりだからあの兵士は捕まらないように気をつけなければならないと記されているだけである。しかし、この言葉の中に、現実社会の厳

しい規律の影が見える。まず二人連れの男女の一人が一般市民ではなく、兵士として設定されている。つまり、カフェの外は、軍隊という大きな組織が力を作用させている社会なのである。一見平和そうに、幸福そうに見える二人の男女ではあるが、一瞬先には何が起こるかわからない。規範から外れ、自分の意志で何かをしようとすると、すぐに拘束されてしまう社会、それが現実なのである。ここで描かれている個々の人間に対する圧力は、衛兵という法律や規則に基づくものであるが、現実社会の人間はこのような法律や規則だけでなく、風習や慣習という目に見えないものによってもたえず圧力を受けている。そしてそのような規範から逃れ、圧力から逃れて心を安らげる場所が大自然の残る森の中であり、現代にあってはこの木蔭のあるカフェなのである。

老人はこのカフェでブランデーを飲みながらも泥酔することではなく、人間としての尊厳を保つ。老人に関して、作品には「この老人は清潔だ。彼はこぼさずに酒を飲む。酔っている今でさえもだ」(“This old man is clean. He drinks without spilling. Even now, drunk.”) (p.20)と述べられているが、彼は酔っても酒をこぼすことはなく、品の良い飲み方をしている。「老人というのは汚いものだ」(“An old man is a nasty thing.”) (p.20)と言う年下のウェ이터に対して述べられた年長のウェ이터のこの言葉は、‘nasty’と ‘clean’という語が対照的に用いられ、読者の心に強く響く。『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*)でヘミングウェイは、酒の酔い方によって登場人物たちを分類し、「マイクは悪い酔っ払いだ。ブレットは良い酔っ払いだ。ビルは良い酔っ払いだ。コーンは決して酔わない」(Mike was a bad drunk. Brett was a good drunk. Bill was a good drunk. Cohn was never drunk.) (p.148)⁹⁰と記している。ヘミングウェイにとって酒の飲み方は人物の質をはかる重要な判断基準の一つであることがわかる。更に酒を飲むことの効用についても、同じ『日はまた昇る』の中で作者は「ゆっくりと味わいながら一人で飲むのはとても楽しいことだった。一本のワインは良い友達だった」(It was pleasant to be

drinking slowly and to be tasting the wine and to be drinking alone. A bottle of wine was good company.) (pp.232-33)と述べる。ヘミングウェイは、酒を飲むことにおいても、酒に飲まれることなく、品位を保ちながら、生を享受するために味わいながら飲むことを求める。

短篇「三日の嵐」('The Three-Day Blow')で ニックは、ビールと酒を飲みながら楽しい会話をかわし、失恋後の傷の痛みを癒すが、その中でニックは、自分の父が酒を一滴も飲まないことについて「彼は酒を飲まないことで多くのことを得損なっている」("He's missed a lot.") (p.44)⁹⁰と「悲しげに」('sadly')述べる。また『日はまた昇る』でミピポッポラス伯爵(Count Mippipopolous)はジェイク(Jake Barnes)に対して、酒を飲む意味について「酒に求めるのはそれを楽しむことだけです」("all I want out of wines is to enjoy them.") (p.59)と説明する。「光によく照らされた清潔な場所」の老人は、80才になる老人であり、年下のウェ이터からは「汚い」('nasty')と嘲笑される老人ではあるが、先にも述べたように、彼の酒の飲み方には品位があり、威厳がある。年下のウェ이터から追い立てられるようにして店を出た老人の姿は、「ふらつきながらも威厳のある歩き方だった」(The waiter watched him go down the street, a very old man walking unsteadily but with dignity.) (p.21)と記されている。たとえどんなに酔っていようと、足がふらつこうとも、彼には威厳があり、その威厳は他からはっきりと見て取れたのである。

しかし、問題は、この世の中には老人のような人間がたくさんいることである。いや、むしろ、年下のウェ이터のように妻と寝ることを考えている愚かな人間('stupid people') (p.21)は別にして、人生を真剣に生きる人間は老人になるのである。滝川元男氏は、『ヘミングウェイ再考』の中で、「この老人は人生の敗者である」⁹²と述べるが、人間は皆、行き着く先、人生の敗者となるのである。老人は金をたくさん持っていた。しかし、彼は「絶望」し、自殺をはかった。所詮、金は金で、人生の生きがいにはならない。むしろ「キリマンジャロの雪」('The Snows of

Kilimanjaro')の主人公ハリーのように金があるために自己の才能を潰してしまふ者もいる。年長のウェイターには老人の心がよくわかる。彼は老人が去った後で、「無だ、無だ、すべてが無なのだ」(...he knew it all was nada y pues nada y nada y pues nada.) (p.23) と考える。

「光によく照らされた清潔な場所」は、「結局、おそらくただ単に不眠症なのだ。多くの人がそうに違いない」(After all, he said to himself, it is probably only insomnia. Many must have it.) (p.24)という老人の心に理解を示すウェイターの眩きで終わるが、この世の中、先にも述べたが、男と女の営みの軋轢に疲れ、社会の規範の圧力に疲れ、生活に疲れ、夜眠れないで、静かな夜にこそ清潔に生活する人は多いのである。もちろんヘミングウェイの主人公の場合、短篇「今横たわりて」('Now I Lay Me')や「人こそ知らね」('A Way You'll Never Be')⁸³に詳しく述べられているように、戦時中に受けた戦傷が原因で不眠症になっているという事情もある。しかし、これも戦争という大きな社会の組織によってもたらされた肉体的、精神的圧迫の結果である。古き良き大地との接触を求める人がいる以上、木蔭を提供する、光によく照らされた清潔な場所は必要なのだ。物質万能の世界ではあるが、この老人のように金がいくらあっても何の解決にもならない。「キリマンジャロの雪」では、女と金が主人公の作家としての才能を朽ちさせる原因となっている。木蔭という大自然の大きな懷に抱かれて、誰に触れられることもなく、老人は一人酒を楽しんで生きていく。晩年の作『老人と海』においても、老人は、一人で海に出ていく。そして激しい格闘の末捕えた大魚を、帰路鮫にすべて食べられ、大魚の頭と骨だけを持って帰港する。人生は無なのだ。しかし、すべてを失われた裸の自分の中にこそ真実の生き方がある。

明るく電燈に照らされた木蔭のあるカフェ、清潔な早朝の臭いのする海、作家としての能力を朽廃させた主人公が死を目前にして夢の中に見る「太陽の光を受けて信じられないほど白く輝く」('unbelievably white in the sun') (P.27)⁸⁴ キリマンジャロの山頂、これらはすべて現実からは一步離れ

た場所にある社会ではあるが、ヘミングウェイが安らぎを求めてもがいていった行き着く先にある「清潔で光のよくあたる」場所であったように思える。

ヘミングウェイは、『午後の死』(*Death in the Afternoon*)の中で、「戦争が終わった今となつては、生と死が、即ち暴力的な死が見られる場所は闘牛場だけだ」(The only place where you could see life and death, i.e., violent death now that the wars were over, was in the bull ring. ...) (p.2)⁸⁰という有名な言葉を残しているが、彼は生涯にわたり、生と死が正面からぶつかりあう場面を求めた。短篇「兵士の家」で、彼は戦争に参加していた時代を「思い出すと心の中が爽やかになる時代」(the times that had been able to make him feel cool and clear inside himself when he thought of them;) (p.69) と表現し、戦争で得た経験を「冷んやりとした貴重な価値」('cool, valuable quality') (p.70) (下線は筆者) と表したが、戦争とはまさに生と死が隣り合わせで住むところである。このように考えるとき、「光によく照らされた清潔な場所」で老人が自殺を試み、『老人と海』で老人が「どちらがどちらを殺してもかまわない」(I do not care who kills who.) (p.92) という戦いをした後で、死んだようにぐっすりと眠り、「キリマンジャロの雪」で主人公ハリーが、死を目前にして純白の雪を見ることは決して偶然の出来事ではない。彼らは皆、真剣に生き、その結果として死の直前にあるのだ。この世の営みはすべて無であり、そこに何らかの意味を見いだすことは難しいと考える作者ではあるが、せめて真剣に生き、真剣に死ぬる場所は、光のよくあたる清潔な場所ではなくてはならないと考える。清く浄化された純粋な場所ではなくてはならないのだ。ここから 'white' 'cool' 'clear' 'clean' という語が生まれてくる。年長のウェイターが店を出てから立ち寄るような「汚れた」('unpolished') (p.24) 場所であつてはならないのだ。年長のウェイターは作品の終わり近くで「天に坐します我らが父よ…」という聖書の文言をもじり、「無に坐します我らが無よ…」(Our nada who art in nada,...) (p.23) と唱える

が、人が生きることに絶望しながらも真剣に生き、安らぎを持ちながら真剣に死ぬる場所は、無という神の光によく照らされた清潔な場所なのである。

注

- (1) Ernest Hemingway, 'A Clean Well-Lighted Place,' *Winner Take Nothing* (New York: Charles Scribner's Sons, 1933), p.17.以下、この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- (2) F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925), p.182.
- (3) Ernest Hemingway, 'The Doctor and the Doctor's Wife,' *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925), p.27.
- (4) Ernest Hemingway, 'Big Two-Hearted River:Part I,' *Ibid.*, p.134.日本語訳は拙訳による。
- (5) Ernest Hemingway, 'Big Two-Hearted River:Part II,' *Ibid.*, p.154.
- (6) Ernest Hemingway, 'Soldier's Home,' *Ibid.*, p.71.以下、この作品からの引用及び頁数はこの版による。
- (7) 作品には次のように記されている。'It was all a nothing and a man was nothing too. It was only that and light was all it needed and a certain cleanness and order.' (p.23) (下線は筆者)
- (8) Ernest Hemingway, *The Old Man and the Sea* (New York: Charles Scribner's Sons, 1952), p.28.以下、この作品からの引用及び頁数はこの版により、日本語訳は拙訳による。
- (9) この 'everything' に関しては、「何かの終わり」 ('The End of Something') でニックがマージョリー (Marjorie) に別れを告げる場面でも、"You know everything." (*In Our Time*, p.34) と皮肉をこめて使われている。
- (10) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles

Scribner's Sons, 1926), p.148.以下、この作品からの引用及び頁数はこの版による。

- (11) Ernest Hemingway, 'The Three-Day Blow,' *In Our Time* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925), p.44.
- (12) 瀧川元男, 『ヘミングウェイ再考』 (東京: 南雲堂, 1967), p.124.
- (13) 'Now I Lay Me' は短編集 *Men Without Women* に、'A Way You'll Never Be' は *Winner Take Nothing* におさめられている。
- (14) Ernest Hemingway, 'The Snows of Kilimanjaro,' *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York: Charles Scribner's Sons, 1964), p.27.
- (15) Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon* (New York: Charles Scribner's Sons, 1932), p.2.

参考文献

- 石 一郎 『愛と死の獵人<ヘミングウェイの実像>』 南雲堂 1988
- 岡田春馬 『ヘミングウェイの短編小説』 近代文藝社 1994
- 嶋 忠正 『ヘミングウェイの世界』 北星堂書店 1975
- 西尾 巖 『ヘミングウェイ小説の構図』 研究社出版 1992
- 瀧川元男 『ヘミングウェイ再考』 南雲堂 1967
- Baker, Carlos. *Hemingway: The Writer As Artist*. New Jersey: Princeton University Press, 1972.
- Benson, Jackson J. ed.. *New Critical Approach to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Durham and London: Duke University Press, 1990.
- Benson, Jackson J. ed.. *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*. Durham, North Carolina: Duke University Press, 1975.
- Gurko, Leo. *Ernest Hemingway and the Pursuit of Heroism*. New

York: Thomas Y. Crowell Company, 1969.

McCaffery, John K.M., ed.. *Ernest Hemingway: The Man and his Work*. New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1969.

Young, Philip. *Ernest Hemingway*. New York: Rinehart & Company, Inc., 1952.